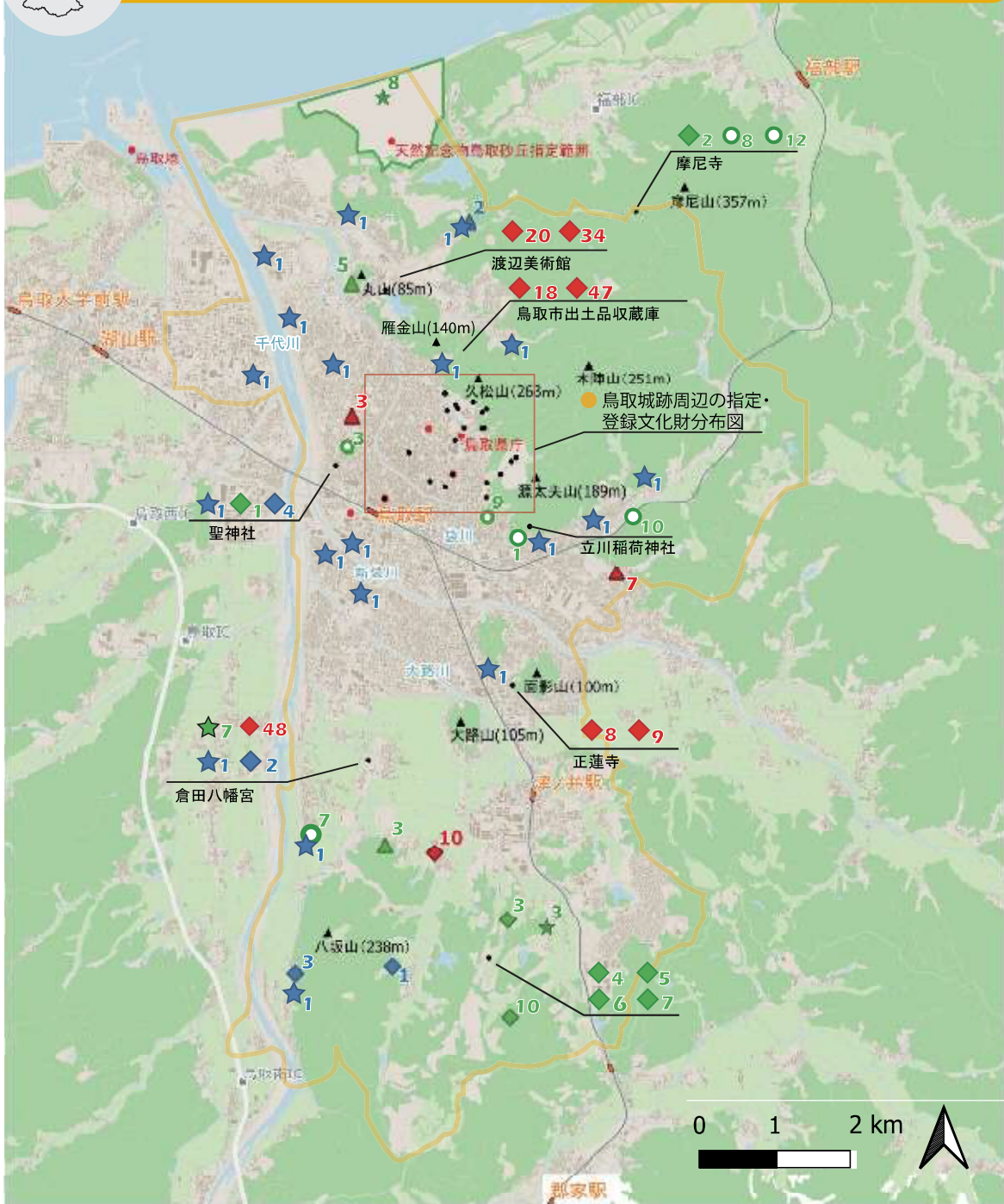




③ 鳥取市街地地域



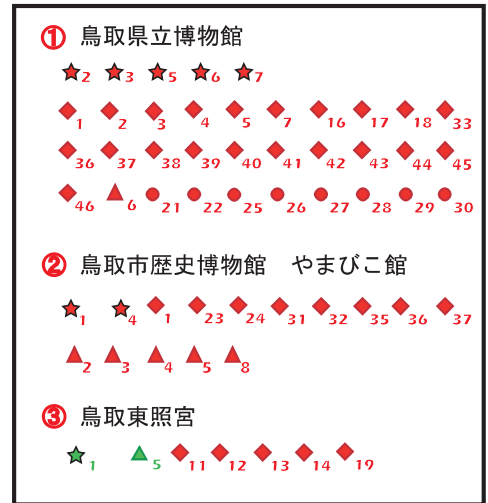
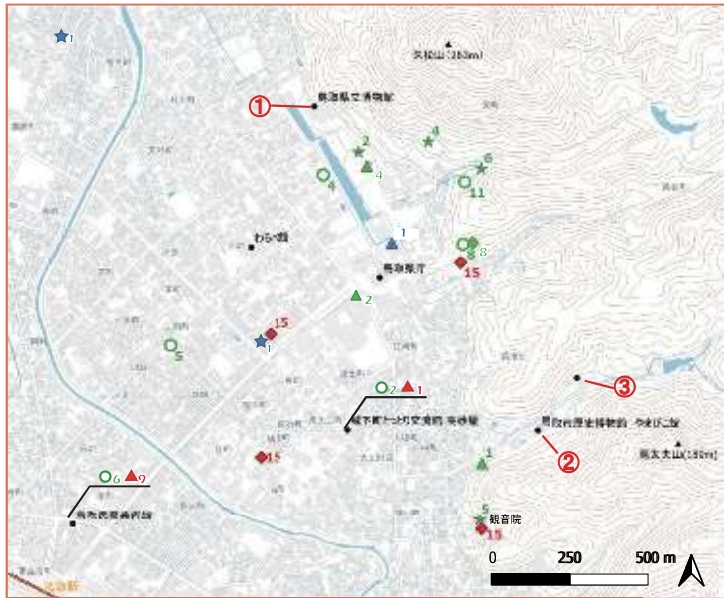
● 鳥取市街地地域の指定・登録文化財分布図

指定・登録文化財のリストはP116～118参照。

【地 勢】

この地域は江戸時代に城下町が形成され、現在の中心市街地を含む鳥取平野の東側地域にあたります。北側は日本海に面し、西側は千代川、東側は市内の福部町と国府町、南側は八頭郡八頭町、河原町と接しています。

千代川の下流域にあたるこの地域の東側には、本市のランドマークである久松山(263m)をはじめ、摩尼山(357m)、稲葉山(249m)、南側には八坂山(238m)、空山(340m)など標高200～400mの小起伏山地が所在し、西側には鳥取県の三大河川の一



● 鳥取城跡周辺の指定・登録文化財分布図

指定・登録文化財のリストはP116～118参照。



● 久松山



● 空山



● 久松山と市街地

写真提供：鳥取県文化財課



● 浜坂砂丘

写真提供：鳥取県文化財課

つである千代川が北に流れています。その千代川には扇ノ山(1310m)に源流を持つ袋川などの支流が注ぎ込み、その河川沿いに低平な沖積地(鳥取平野)が広がっています。河口付近の沿岸部は、千代川により運搬された土砂が堆積した砂丘群が発達し、砂丘の形成により鳥取平野は海岸線と隔絶した地形となっています。

千代川流域は、有史以来頻りに洪水に見舞われており、千代川だけでなく、袋川や新袋川など洪水を防ぐため繰り返し河川改修が行われ、市内では河川の変遷が最も顕著な地域といえます。

【歴史】

縄文海進時には内海となっており、海退後に形成された平野部には弥生時代から人々が暮らし始め、海浜部に近い場所には弥生時代から中世・近世にかけての複合遺跡である秋里遺跡、独立丘陵の大路山の麓には弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である西大路土居遺跡が確認されています。古墳時代に入ると鳥取平野南部の丘陵地には多くの古墳が築かれ、前期には美和32号墳、前期後葉には古郡家1号墳や六部山3号墳、後期には空山古墳群、八坂古墳群など多くの古墳群が確認されています。

16世紀に入ると守護職山名一族の争いから、但馬山名氏が久松山に砦を築き、天正元年(1573)に因幡守護山名豊国が守護所を天神山城から鳥取城に移しました。天正8年(1580)の第1回鳥取城攻めにより山名豊国が降伏し鳥取城を出ますが、毛利方により鳥取城が奪取され、鳥取城主として毛利の武将・吉川経家が入ります。しかし天正9年(1581)の第2回鳥取城攻めで羽柴秀吉による兵糧攻めによって敗北しました。その後、宮部継潤が城主となりますが、慶長5年(1600)関ヶ原の戦いの後、近江から池田長吉が入府し、数年かけて鳥取城の城郭・城下の普請を行います。

元和3年(1617)の国替えにより池田光政が播磨より入府し、因幡・伯耆両国32万石の領主となり、手狭だった鳥取城を拡張し、城下町も含めた現在の鳥取城の基礎を築きます。寛永9年(1632)の国替えにより池田光政が備前・備中へ移り、3歳の光仲が入府し、以後12代続く鳥取藩の藩祖となり、城下は山陰随一の都市を形成し繁栄しました。

廃藩置県後の明治9年(1876)に鳥取県は廃止され、明治14年(1881)に再配置されるまでの5年間、島根県に併合されました。この時、江戸時代以来の政治の中心地としての地位を失った旧鳥取城下町は著しく衰退しました。明治22年(1889)に鳥取市が誕生し近代化のための施設が整備されはじめ、明治33年(1900)境港から着工した山陰鉄道は明治45年(1912)に全線開通し、明治40年(1907)に竣工した仁風閣では市内で初めて電気、電話(臨時)が設けられ、大正4年(1915)に近代的上水道による給水が開始されます。

大正期に千代川が三度にわたり氾濫したため、国直轄による治水事業が行われ、昭和5年(1930)に完成しています。また昭和18年(1943)の鳥取大地震、昭和27年(1952)の鳥取市大火災により甚大な被害を受けましたが、大火災により失われた袋川沿いの桜土手の桜並木が篤志家や市民の努力で復興されたほか、若桜街道筋1.3kmが防火建築ビル帯として指定されるなど、人々の復興に努力した姿は現在も市民の財産となっています。

終戦後の昭和24年(1949)に設置された鳥取大学は、昭和27年(1952)から歩兵第40連隊跡の兵舎を改造して大学本部と学芸学部を置き、昭和41年(1966)に学芸学部は農学部とともに現在の地(湖山町)に統合・移転します。その際学芸学部は教育学部と改称し、あわせて工学部が新設されました。その跡地には三洋電機株式会社の製造部門担当工場として鳥取三洋電機株式会社が設立され、電子部品等の製造が行われました。以降電子部品等の製造は、本市の基幹産業となっていきます。

昭和53年(1978)の鳥取駅の高架化、昭和55年(1980)には鳥取駅周辺の土地区画整理事業が行われ現在の市街地が形作られていき、市制施行130周年を迎えた令和元年(2019)には本市の本庁舎が幸町に移転・開庁しました。

【鳥取市街地地域年表】

時代	年代	できごと
弥生時代	中期	西大路土居遺跡及び秋里遺跡。
古墳時代	前期	美和 32 号墓（方墳）、六部山 3 号墳、古郡家 1 号墳（いずれも前方後円墳）が築かれる。
	後期	線刻壁画を持つ古墳を含む空山古墳群が築かれる。
中世	16 世紀中頃	但馬守護職山名氏により、久松山に砦が築かれる。
	天正元年 (1573)	武田高信を退けた山名豊国が、天神山城から鳥取城に守護所を移転する。
	天正 8 年 (1580)	羽柴秀吉の第 1 回鳥取城攻め。山名豊国降伏して鳥取城を出るが、毛利方が鳥取城を奪取する。
	天正 9 年 (1581)	羽柴秀吉の第 2 回鳥取城攻め。兵糧攻めの末、毛利方が降伏。吉川経家の切腹、宮部継潤が鳥取城主となる。
近世	慶長 5 年 (1600)	関ヶ原の合戦後、池田長吉が鳥取城主となり城郭・城下の普請を行う。
	元和 3 年 (1617)	池田光政が、鳥取城を鳥取藩 32 万石の居城として整備。袋川の付替えなどを行い現在の城下町の基礎を築く。
	寛永 9 年 (1632)	池田光仲が鳥取城主となり、鳥取池田家が成立する。
	慶安 3 年 (1650)	因幡東照宮（鳥取東照宮）建立。
近代	明治 22 年 (1889)	鳥取市制の施行。
	明治 30 年 (1897)	歩兵第四十連隊設置される。
	明治 33 年 (1900)	山陰鉄道、境を起点に着工。明治 40 年 (1907) 境～鳥取開通。明治 45 年 (1912) 山陰線全線開通。（京都 - 出雲今市）
	明治 40 年 (1907)	皇太子山陰道行啓、仁風閣が建設され、市内で初めて電気、電話（臨時）が整備される。
	大正元年 (1912)	千代川の氾濫による大洪水。以降大正 7 年 (1918)、大正 12 年 (1923) にも氾濫。
	大正 4 年 (1915)	上水道施設完成、給水開始。
	昭和 5 年 (1930)	千代川の大改修完成。
	昭和 18 年 (1943)	市内を震源とする鳥取大地震 (M7.2) が発生し、壊滅的な被害を受ける。
現代	昭和 24 年 (1949)	鳥取大学設立。昭和 41 年 (1966) に湖山町に統合移転。
	昭和 27 年 (1952)	鳥取市大火災により旧市街地の約 3 分の 2 が焼失。
	昭和 41 年 (1966)	旧鳥取大学跡地に鳥取三洋電機株式会社設立。
	昭和 53 年 (1978)	鳥取駅の高架化完了。
	平成 12 年 (2000)	鳥取市歴史博物館（やまびこ館）開館。
	令和元年 (2019)	麒麟のまち圏内（鳥取市を含む 1 市 6 町）によるストーリーが、日本遺産に認定。 鳥取市制施行 130 周年・新本庁舎完成記念式典。 鳥取市 新本庁舎開庁。

【鳥取市街地地域の指定文化財と登録文化財】

※令和3年3月31日時点で、地域内にある指定・登録文化財を掲載。

No.	指定種別	名 称	所 在 地	資料編掲載頁	
もの	★	1 重要文化財	梵鐘	上町 鳥取市歴史博物館 (寺町 本願寺所蔵)	P3
		2 重要文化財	子持勾玉	東町 鳥取県立博物館	P4
		3 重要文化財	金字法華経 (巻第二、第四)	東町 鳥取県立博物館 (立川町 大雲院所蔵)	P3
		4 重要文化財	栗谷遺跡出土品	上町 鳥取市歴史博物館	P3
		5 重要美術品	埴輪鹿 脚部補修 // 埴輪男子像 残闕	東町 鳥取県立博物館 (湖山町 鳥取大学から出品)	P13
		6 重要美術品	袈裟褌文銅鐸	東町 鳥取県立博物館	P13
		7 重要美術品	家屋形弥生式土器 下部欠失	東町 鳥取県立博物館	P13
	◆	1 保護文化財	絹本著色群鯉図	東町 鳥取県立博物館	P15
		2 保護文化財	紙本墨画雲竜図	東町 鳥取県立博物館	P16
		3 保護文化財	紙本墨画群鯉遊泳図六曲屏風	東町 鳥取県立博物館	P16
		4 保護文化財	絹本著色猛虎図	東町 鳥取県立博物館 (個人蔵)	P16
		5 保護文化財	絹本著色富士見西行図	東町 鳥取県立博物館 (個人蔵)	P15
		6 保護文化財	紙本淡彩老樹図	立川町 (非公開)	P16
		7 保護文化財	絹本著色東方朔図	東町 鳥取県立博物館	P15
		8 保護文化財	木造毘沙門天立像	正蓮寺 毘沙門堂	P17
		9 保護文化財	木造吉祥天立像	正蓮寺 毘沙門堂	P17
		10 保護文化財	木造薬師如来坐像	古郡家 森福寺	P17
		11 保護文化財	太刀銘 (表) 信濃大掾藤原忠国 玉纏太刀式の太刀拵	上町 鳥取東照宮 (東町 鳥取県立博物館へ出品)	P18
		12 保護文化財	太刀銘 (表) 信濃大掾藤原忠国 第一太刀式の太刀拵	上町 鳥取東照宮 (東町 鳥取県立博物館へ出品)	P18
		13 保護文化財	太刀銘 (表) 信濃大掾藤原忠国 鏝剣 (飾太刀) 拵	上町 鳥取東照宮 (東町 鳥取県立博物館へ出品)	P18
		14 保護文化財	太刀銘 (表) 伯耆国倉吉住人 播磨大掾藤原正綱	上町 鳥取東照宮 (東町 鳥取県立博物館へ出品)	P18
		15 保護文化財	切支丹灯籠	栗谷町、戎町、西町、上町	P19
		16 保護文化財	子持勾玉	東町 鳥取県立博物館蔵 個人蔵	P20
		17 保護文化財	流水文銅鐸	東町 鳥取県立博物館	P20
		18 保護文化財	桂見遺跡出土縄文時代遺物一括 丸木舟 2 艘 櫂 9 本	東町 鳥取県立博物館 湯所町 鳥取市出土品収蔵庫	P19
		19 保護文化財	三十六歌仙額	上町 鳥取東照宮 (東町 鳥取県立博物館へ出品)	P16
		20 保護文化財	松に猿嵌木丸額	覚寺 渡辺美術館	P19
		21 保護文化財	紙本金地著色竹梅図・ 紙本著色草虫図衝立	東町 鳥取県立博物館 (個人蔵)	P16
		22 保護文化財	絹本著色東下り・耕作・草花図	東町 鳥取県立博物館 (個人蔵)	P14
		23 保護文化財	小札鋳留眉庇付冑	上町 鳥取市歴史博物館	P19
24 保護文化財	蔵見 3 号墳出土鷗尾付陶棺附 出土遺物一括	上町 鳥取市歴史博物館	P19		
25 保護文化財	梵鐘	東町 鳥取県立博物館 (河原町 国英神社所蔵)	P18		
26 保護文化財	絹本著色釈迦十六善神像	東町 鳥取県立博物館 (用瀬町鷹狩 大安興寺所蔵)	P15		
27 保護文化財	塩文書	東町 鳥取県立博物館	P21		
28 保護文化財	伯耆国八橋郡上伊勢村方見神社 神職池本家資料	東町 鳥取県立博物館	P21		
29 保護文化財	古郡家 1 号墳出土遺物一括	東町 鳥取県立博物館	P19		
30 保護文化財	銅鰐口 伯州瀧山寺銘	東町 鳥取県立博物館	P18		
凡 例	★…国指定、◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定				

		No.	指定種別	名称	所在地	資料編掲載頁	
もの	◆	31	保護文化財	理性院等相承血脈次第 (紙背後亀山上皇院宣案)	上町 鳥取市歴史博物館	P21	
		32	保護文化財	上田家文書	上町 鳥取市歴史博物館	P20	
		33	保護文化財	池田恒興像 (狩野尚信筆)	東町 鳥取県立博物館	P14	
		34	保護文化財	平家物語 宇治川先陣・弓流図屏風	覚寺 渡辺美術館	P16	
		35	保護文化財	北川家文書	上町 鳥取市歴史博物館 (個人蔵)	P21	
		36	保護文化財	旧興国寺書院障壁画	東町 鳥取県立博物館	P14	
		37	保護文化財	宮本家文書	東町 鳥取県立博物館	P21	
		38	保護文化財	絹本着色愛染明王像	東町 鳥取県立博物館 (用瀬町鷹狩 大安興寺所蔵)	P14	
		39	保護文化財	絹本着色三宝荒神像	東町 鳥取県立博物館 (用瀬町鷹狩 大安興寺所蔵)	P15	
		40	保護文化財	絹本着色五大明王像	東町 鳥取県立博物館へ寄託 (用瀬町鷹狩 大安興寺所蔵)	P15	
		41	保護文化財	伝亀井茲矩将来品	東町 鳥取県立博物館 (鹿野町今市 讓傳寺所蔵)	P18	
		42	保護文化財	吉川元春祈願状・寄進状	東町 鳥取県立博物館 (鹿野町寺内 加知弥神社所蔵)	P21	
		43	保護文化財	浅津文書	東町 鳥取県立博物館	P20	
		44	天然記念物	扇ノ山の火山弾	東町 鳥取県立博物館	P30	
		45	天然記念物	ナウマンゾウ牙 (温泉津沖日本海底産)	東町 鳥取県立博物館	P31	
		46	天然記念物	ナウマンゾウ牙 (萩沖日本海底産)	東町 鳥取県立博物館	P31	
		47	保護文化財	倭文 6号墳出土遺物	湯所町 鳥取市出土品収蔵庫	P20	
		48	有形民俗文化財	馬場八幡人形芝居道具	馬場	P25	
		▲	1	保護文化財	元大工町古絵図	元大工町	P37
			2	保護文化財	石井家文書	上町 鳥取市歴史博物館	P35
			3	保護文化財	寒山拾得図	新品治町	P33
			4	保護文化財	羽柴秀吉感状	上町 鳥取市歴史博物館 (個人蔵)	P36
			5	保護文化財	羽柴秀吉禁制	上町 鳥取市歴史博物館 (個人蔵)	P36
			6	保護文化財	絹本着色不動明王図	東町 鳥取県立博物館 (用瀬町鷹狩 大安興寺所蔵)	P33
			7	保護文化財	蝦夷風俗圖式、蝦夷器具圖式	岩倉	P33
			8	有形民俗文化財	嶋人形一式	上町 鳥取市歴史博物館	P41
			9	有形民俗文化財	百歳祝着	栄町 鳥取民藝美術館	P41
	凡例	★…国指定、◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定					

		No.	指定種別	名称	所在地	資料編掲載頁	
場	★	1	重要文化財	禰谿神社本殿・唐門・拝殿及び幣殿	上町 鳥取東照宮	P2	
		2	重要文化財	仁風閣	東町	P2	
		3	重要文化財	福田家住宅	紙子谷	P2	
		4	史跡	鳥取城跡附太閤ヶ平	東町、栗谷町、百谷、円護寺	P6	
		5	名勝	観音院庭園	上町	P8	
		6	天然記念物	キマダラルリツバメチョウ生息地	長田神社、興禅寺、禰谿公園	P9	
		7	天然記念物	倉田八幡宮社叢	馬場	P8	
		8	天然記念物	鳥取砂丘	浜坂、福部町湯山	P8	
		◆	1	保護文化財	聖神社本殿、幣殿及び拝殿附透塀 及び棟札 16枚	行徳	P14
	2		保護文化財	摩尼寺仁王門	覚寺	P14	
凡例	★…国指定、◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定、○…国登録						

		No.	指定種別	名 称	所 在 地	資料編掲載頁	
場	◆	3	史跡	坊ヶ塚古墳	広岡	P28	
		4	史跡	空山2号墳	香取	P27	
		5	史跡	空山10号墳	広岡	P27	
		6	史跡	空山15号墳	久末	P27	
		7	史跡	空山16号墳	久末	P27	
		8	名勝	興禅寺庭園	栗谷町	P28	
		9	天然記念物	意上奴神社社叢	香取	P28	
		▲	1	保護文化財	禰谿グランドアパート	上町	P32
			2	保護文化財	箕浦家武家門	尚徳町	P32
	3		史跡	橋本古墳	橋本	P44	
	4		名勝	宝隆院庭園	東町	P47	
	5		天然記念物	禰谿神社社叢	上町	P47	
	6		天然記念物	離水海食洞	浜坂地内	P49	
	○	1	登録有形文化財	立川吉村家住宅主屋ほか5棟	立川町	P11	
		2	登録有形文化財	高砂屋(城下町とっとり交流館) 店舗棟ほか5棟	元大工町	P11	
		3	登録有形文化財	常忍寺本堂	行徳	P10	
		4	登録有形文化財	桜寛苑(旧金田家住宅)主屋・土蔵	東町	P11	
		5	登録有形文化財	五臓園ビル	二階町	P12	
		6	登録有形文化財	鳥取民藝美術館	栄町	P12	
		7	登録有形文化財	有隣荘主屋ほか8棟	国安	P12	
8		登録有形文化財	興禅寺本堂	栗谷町	P10		
9		登録有形文化財	岩田家住宅主屋、離れ、茶屋	立川町	P10		
10		登録有形文化財	立川稲荷神社(本殿ほか3棟)	立川町	P10		
11		登録有形文化財	長田神社本殿ほか7棟	東町	P10		
12		登録有形文化財	摩尼寺本堂・山門・鐘楼	覚寺	P10		
13		登録記念物	摩尼山	覚寺	P13		
凡 例		★…国指定、◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定、○…国登録					

		No.	指定種別	名 称	所 在 地	資料編掲載頁
こと	★	1	重要無形民俗文化財	因幡・但馬の麒麟獅子舞	湯所町、相生町、片原、行徳、田島、立川町、滝山、秋里、古市、天神町、吉成、国安、馬場、雲山、浜坂、江津、覚寺、円護寺、円通寺、安長	P4
	◆	1	無形民俗文化財	越路雨乞踊	越路	P23
		2	無形民俗文化財	倉田八幡宮の麒麟獅子舞	蔵田	P23
		3	無形民俗文化財	円通寺人形芝居	円通寺	P22
		4	無形民俗文化財	聖神社の神幸行列	行徳	P24
		5	無形文化財	七宝(保持者・橋詰峯子)	立川町	P26
	▲	1	無形文化財	尚徳錬武館伝「雖井蛙流平法」	東町	P42
2		無形民俗文化財	覚寺 さいとりさし	覚寺	P40	
凡 例		★…国指定、◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定				

12. 鳥取平野の歴史

鳥取城とその城下町が形成された久松山周辺と鳥取砂丘を含むこの地域は、縄文時代が始まる約1万2千年前の大規模な気候変動による海水面の上昇によって、約6千年前には現在の鳥取駅や市街地も含めた鳥取平野のほとんどが海の底でした。現在の海岸線から約2km内陸にある浜坂の離水海食洞はその痕跡です。

弥生時代の寒冷化によって海水面が低下したことで、平野部には潟湖（ラグーン地帯）が形成され、河口付近で大きく蛇行する千代川や袋川、本陣山を源流とする天神川が集まる湿地帯となっていました。この頃の生活の痕跡は、微高地にある秋里遺跡などに見られます。

和銅5年(712)に成立した『古事記』には、大和朝廷が諸国に鳥を捕らえさせ、これを税として納めるように命じていたという記述があります。この頃、邑美郡となった地域の大部分はまだ水鳥などが羽を休める湿地帯が広がっており、鳥を捕らえて暮らしていた人々が住んでいました。これらの人々が「鳥取部」として従属するようになり、そこから「鳥取」の地名が生まれたとされています。

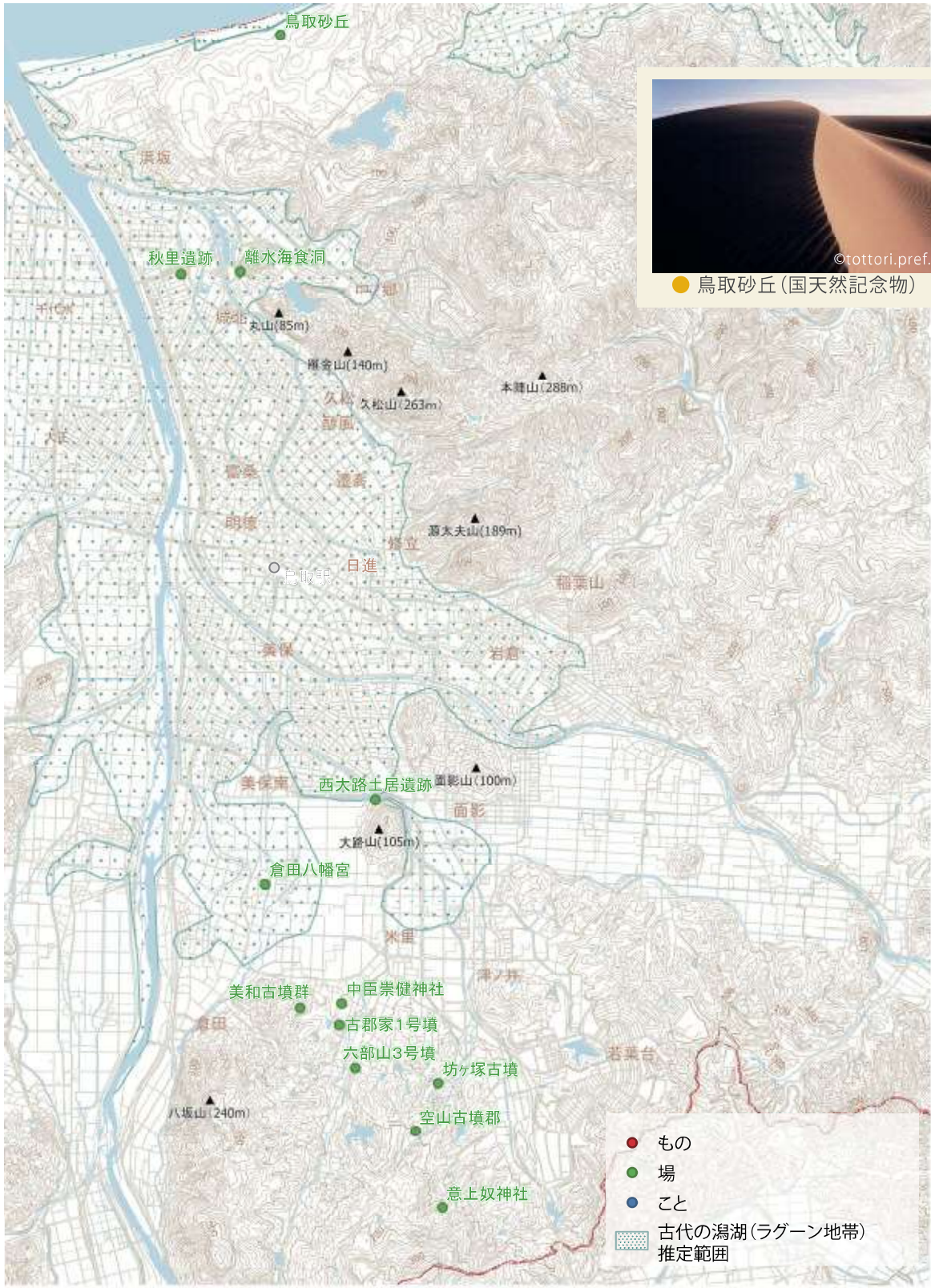
一方南部の丘陵地には、弥生時代の遺跡や六部山3号墳、古郡家1号墳など大型の前方後円墳や空山古墳群などが築かれており、式内社となっている神社も点在しています。

武家社会となった中世には、沿岸部一帯に砂丘が形成され、潟湖や沼沢地が乾き平野部の地盤が安定してくると、因幡守護・山名豊国が日本海へ続く山間の独立峰である久松山の鳥取城に守護所を置いたことで因幡国の中心地となりました。

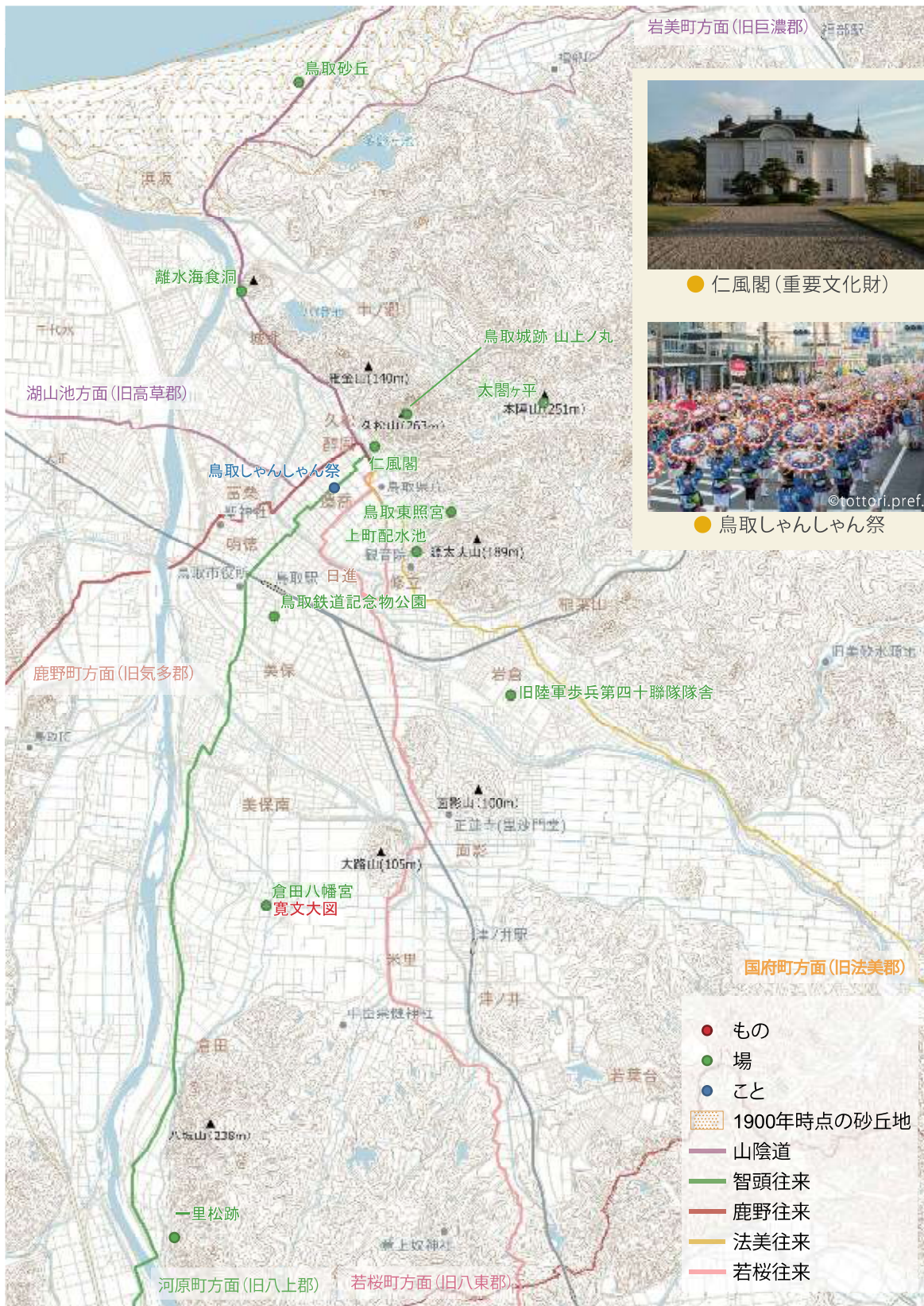
その後鳥取城は、山名氏から毛利氏の支配下に変わり、天正9年(1581)の羽柴秀吉の鳥取城攻めが起こります。毛利家家臣吉川経家が鳥取城主となり、秀吉軍を迎え撃ちましたが、秀吉軍は本陣山に「太閤ヶ平」を築くなどして持久戦に持ち込み、鳥取城を陥落させました。

江戸時代、因幡・伯耆合わせて32万石の大藩となり、寛永9年(1632)徳川家康を曾祖父に持つ池田光仲が鳥取藩主となると、慶安3年(1650)に家康を祀る因幡東照宮（現鳥取東照宮）を建立して徳川将軍家との血縁を内外に示し、以後12代にわたる鳥取藩主池田家の藩祖となります。鳥取城は時代とともに城域の拡張や石垣の改修などの整備が繰り返し行われたほか、久松山の麓に広がる城下町は智頭往来・若桜往来・鹿野往来の3本の道筋を町割の基準線とし、碁盤目状に道路を配するなどして整備され、現在の市街地の原型が作られました。

明治維新後の廃藩置県後の明治9年(1876)から明治14年(1881)の間、鳥取県は島根県に併合されたことで、政治の中心地としての地位を失い、旧鳥取城下町は著しく衰退しました。明治22年(1889)の市制施行以来、明治30年(1897)の陸軍歩兵第40連隊の設置、明治33年(1900)山陰鉄道の西側の路線の着工（全線開通は明治45年(1912)）、明治40年(1907)には皇太子（後の大正天皇）の山陰道行啓に伴う宿泊所として建設された仁風閣に電気、電話設備（臨時）が設けられ、大正4年(1915)に上水道が整備されました。しかし都市化した市街地は、千代川の氾濫や地震・火災など度々被災しました。その度に人々の努力によって復興を遂げ、住民の生命と財産を守るための努力は今も続けられています。



● 12.鳥取平野の歴史 ストーリーマップ①
 潟湖(ラグーン地帯)と遺跡・古墳等の遺構



● 12.鳥取平野の歴史 ストーリーマップ②
近世・近代の遺構

13. 交通の要衝 「久松山」

本市の中心市街地のランドマークとなっている久松山は、地元の人たちから「城山」とも呼ばれ、「城山を見ると、故郷に帰ってきた気持ちになる」と、現在でも多くの人が口にします。

久松山の麓には、古代からの地形上に作られた道が集まり、ところどころに元の姿をしのぼせる「場」や「もの」「こと」が残されており、近世になっても少しずつコースを変えながら使われていたようです。それらの道は久松山麓に集まり、その道を通じた交流の跡が各地に残されています。

因幡国内では、律令制で小路と位置付けられていた古代の山陰道は、因幡国を東西に走っていたと考えられ、善田傍示ヶ崎遺跡よしだぼうじがさきや青谷横木遺跡などでは道路遺構が検出されています。また、現在の播磨（姫路市方面）から美作（津山市方面）に向かう美作道から佐用町で分岐して中国山地を越えてきた道は、因幡と都を結ぶ道として使用されていたようで、千代川に沿って北上して久松山付近で山陰道と合流していたようです。この道は江戸時代には智頭往来と呼ばれるようになり、備前（岡山市方面）から山を越えて佐治を経由する道も用瀬で合流していました。また伯耆往来は「安長の渡し」とされたあたりで千代川を越え、大野見宿禰命神社の前を通過して伯耆（米子市方面）に向かっていました。

さらに、因幡から但馬（兵庫県北部方面）に向かう但馬往来と、福部から久松山の東側を廻りこんでくる百谷・小西谷の道が、久松山の麓まで伸びています。但馬往来は千代川に出会ったところで南下し、久松山系の丸山城・雁金山城・鳥取城の足元を通り、智頭往来へと合流します。同じように、久松山系の南東の端部、現在の稲葉山付近で百谷・小西谷の道も合流し、国府平野を通過して岩美へ抜ける法美往来につながります。これらは、鳥取城下町が作られる以前、久松山麓がまだ湿地帯だった時代に、山や川を避けて使われた道だったと考えられ、但馬往来と法美往来は久松山の麓で合流していました。



● 久松山と市街地

写真提供：鳥取県文化財課



● 13.交通の要衝 久松山 ストーリーマップ

このように因幡国の主要な街道が合流していた久松山は、深い谷によって隔てられ、海と山に分断されがちな因幡国を結ぶように、古代の国府と湖山池のほとりにあった中世の山名氏の守護所の両方の役割を引き継いで、因幡国の中心地となっていきます。

天正元年(1573)山名豊国が守護所を置いた鳥取城は、久松山の地形を巧みに利用した山城で、尾根を切り盛りして平らな敷地を造り、その周囲に切岸と呼ぶ急な斜面を造り防御を固めた「城」の字のごとく「土」から「成る」城でした。その後、天正9年(1581)鳥取城主となった吉川経家は、丸山城と雁金山城を築城し、羽柴秀吉を迎え撃ちました。

この戦で、秀吉は本陣を久松山(鳥取城)の東側に置き(本陣山の太閤ヶ平と称される場所)、智頭往来と百谷側の道を補給路としていました。百谷は、応仁の乱に際して公家の柳原家の所領があり疎開してきた所でもあり、当時としては開けた場所だったようです。また、久松山北西側の円護寺・覚寺についても、戦国時代までは大寺院だった摩尼寺を制圧して掌握していたため、海路と丸山城から尾根上を通る道以外の久松山山頂への交通を遮断する形の本陣となっています。摩尼寺を制圧したことで、修験者等が利用していた山中の道も、あるいは掌握していたのかもしれませんが。秀吉本陣が、鳥取城側に対しては非常に堅固な防御施設を設置しているのに対し、吉川側の背後にあたる東側に対してはほとんど警戒していない構造となっているのはこのためと考えられ、最終的には雁金山城と鳥取城の間の「塞の峠」という谷間で補給路を断ち切って、秀吉は吉川経家の籠城する鳥取城を孤立させ、落城させました。

切腹して果てた吉川経家をはじめ、主だった武将たちの墓は丸山城跡ふもとにある奈佐日本之介らのものと伝えられる墓や、円護寺の吉川経家の墓などが残され、今も戦いの記憶を留めています。



● 太閤ヶ平(国史跡) 平面図



● 太閤ヶ平(国史跡)から見た久松山



● 吉川経家と久松山

14. 鳥取平野南部の歴史

鳥取平野南部の津ノ井・米里周辺は縄文海進の影響を受けなかった平野部で、独立丘陵の大路山の麓には弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である西大路土居遺跡が確認されているほか、通称「空山」から延びるなだらかな丘陵地帯には約700基余りの古墳があり、密度・規模とも因幡最大の古墳群地帯となっています。鳥取平野を見下せる位置に築かれた六部山3号墳は、4世紀中頃のものとしてされる千代川東岸では最古の前方後円墳で、陪冢を従え六神銅鏡や因幡型円筒埴輪を組み合わせた埴輪棺が出土しています。

西方には古郡家1号墳が4世紀末頃に築かれています。全長92.5mの規模を有するこの地域最大の前方後円墳には、墳丘に円筒埴輪が立ち並び、前方部には葺石が葺かれていたと考えられており、墳丘の規模や出土した豊富な副葬品から、この地域有数の勢力をもった豪族の存在がうかがえるほか、大和・丹後との繋がりを示す八手葉形青銅品が確認されています。またこの丘陵地には、本殿を持たず石玉垣を神座とする中臣崇健神社や、胸高直径が2mに達する巨木が多数生育する社叢が残る意上奴神社などの式内社が鎮座しています。

このほか、平安時代中期のものと思われる木造薬師如来坐像が伝わる森福寺や、平安時代後期のものと思われる木造毘沙門天立像・木造吉祥天立像が伝わる毘沙門堂など、古代からの歴史を物語る遺跡や社寺が残ります。

中世から近世にかけて因幡国の中心地が鳥取平野に移り、天正9年(1581)の羽柴秀吉の鳥取城攻めが起こった頃には、鳥取城へ向かう街道がこの地域を通過しています。後の若桜往来や智頭往来となる街道に挟まれた平野部のほぼ中央に鎮座する倉田八幡宮は、秀吉軍によって社殿が焼かれ、鎌倉時代に1,300石以上の荘園「滝芳庄」を有していたとされる社領は没収されましたが、江戸時代に鳥取藩主池田光仲の庇護のもと社殿が再建され、鳥取藩の祈願所となりました。この神社の高さ30m以上で胸高直径3.5mのイチョウや樹齢約350年のスダジイのほか、樹齢200年以上の巨木が多く残る社叢は国の天然記念物に指定され、参勤交代に利用された智頭往来から境内に至る参道には松並木があり、本数が減ったものの往時の様子うかがえます。

若桜往来沿いには代々津ノ井村の庄屋を務めた福田家の福田家住宅が、県内最古の住宅建築として残るほか、江戸時代に流行した伊勢詣（お伊勢参り）の道として使用されたことを示す伊勢道の道標が残っています。

また江戸末期から明治時代に因幡地方で盛んに行われた人形浄瑠璃を今に伝える円通寺人形芝居扇楽座は、鳥取城の築城や城下町整備の際、城郭に使う石を山から切り出し運び出す労働に駆り出された石工らが歌った石切唄「念力節」、（円通寺節）に合わせて、素朴な三吉デコを操ったことに始まるといわれています。初代座主の藤右衛門はこの地域の出身で、彼の美声による節まわしで知られるようになり、「扇楽座」を名乗って遠方まで興行を行うようになり、今日の礎を築きました。



● 円通寺人形芝居
（県無形民俗文化財）



15. 城下町鳥取のなりたち

本市の中心市街地の町割は、江戸時代の城下町を原型としています。言うまでもなくその中心は久松山に築かれた鳥取城です。明治維新後、建物は撤去されましたが、石垣や堀など、重要な遺構はそのまま残されており、因幡・伯耆の二国（ほぼ現在の鳥取県全域）を領有する32万石の歴史を伝える重要な城郭です。

天正9年(1581)、秀吉はその東南側の本陣山に陣取り、吉川経家が立てこもる久松山鳥取城を大軍勢で取り囲み、厳しい兵糧攻めによって落城させました。久松山系の山々にあるこの時の土の城は「古城」として藩によって管理され、山中の道については管理者である山奉行以外は知ってはならないことになっていました。また、秀吉軍の築いた堅固な陣城の遺構（土塁や空堀など）がほぼ当時のまま残されており、当時の織田勢力の強力さを見ることができます。

鳥取城は、その後秀吉の部将であった宮部継潤を経て、池田長吉から池田家一門の城となり、のちの岡山藩主池田光政が城主となりました。

元和3年(1617)、池田光政の襲封^{しゅうほう}によって、鳥取藩は因幡・伯耆二国を合わせて32万石の大藩となりました。鳥取城とその城下町も、藩の規模の拡大（長吉時代6万石→32万石）にあわせて拡張されることとなり、元和5年(1619)にその工事が始められました。その後、光政との国替で入国した池田光仲が城下町の建設を引き継ぎ、元禄頃に一応の完成をみたと考えられています。



● 15.城下町鳥取のなりたち ストーリーマップ

光仲以降の近世鳥取藩の資料は比較的豊富に残されており、城下町に限らず近世の藩領の様子を具体的に知ることができます。城下町は、城山である久松山を中心に全体が計画され、城郭附近に重臣、惣構そうがまえにあたる袋川の内側に中級家臣の屋敷を配置し、それらに取り囲まれるように京都に習った碁盤の目状の町人町を置く基本プランを採っています。また、光仲の時代の慶安3年(1650)に、鳥取城と並ぶ城下町のもう一つの中心として、徳川家康を神として祀る鳥取東照宮が勧請され、別当寺院として大雲院や門前町としての上町が整備されました。

惣構やげんぼりを形成する袋川、重臣の居住地と町人町を区画する薬研堀、町人町の一町単位での木戸の設置など、人の移動を細かく制限するとともに、城下町外部に続く若桜往来・智頭往来・鹿野往来の三つの街道と、城下町造営のために開削された袋川によって、輸送・交通路を確保しました。



● いなげこくとっとりえす 元和5年(1619) 岡山大学附属図書館所蔵



● 薬研堀跡



● みのうらげけもん (市保護文化財)



● 高砂屋 (城下町とっとり交流館) (登録有形文化財)

特に智頭往来は参勤交代の道として、城下の出口にあたる棒鼻や倉田八幡宮参道、茶屋本陣などの整備がされました。叶の大曲かのう おおまがりで道が一度大きく曲がるのは、参勤交代する藩主が振り返らずに鳥取城を最後に見納めるための場所でした。

商人や職人といった町人たちの資料は、近代までの災害の影響もあって藩の資料ほど豊富ではありませんが、「石井家文書」や「元大工町古絵図」といった古文書のほか、「城下町交流館高砂屋」の佇まいなどから往時を偲ぶことができます。山手や寺町の寺社群、地下に眠る城下町時代の遺構も含め、現在も鳥取城下町は眼前にあるといえるでしょう。このような鳥取城下町の基本プランは江戸時代を通じて不変で、周辺村落の都市化による膨張はみられるものの、基本的には大きく変わることはありませんでした。

また、荒木又右衛門あらかまたえもんや深尾角馬ふかおかくまといった武芸者や小泉友賢・安倍恭庵・岡島正義らの江戸時代の歴史学者の墓所、市内各地域に残る稲荷神社などを通じて現代のまちなみの中に、江戸時代の面影を見つけ出すことができます。

明治維新後、鳥取城は国有地となり、明治12年(1879)にはほぼすべての建物が解体されました。明治23年(1890)に跡地を池田家が買い戻し、仁風閣の建築や久松公園の整備が行われ、昭和19年(1944)に市民の強い要望によって、池田家から本市へ寄贈されてからも、文化財・観光地・市民の憩いの場として親しまれています。かつて、久松山山頂と湯所町を結ぶロープウェイが建設されるなど、観光資源として大規模な活用が試みられたこともありましたが、現在は国史跡鳥取城跡の復元整備等、地域の重要な歴史文化資源としての保存、活用整備が進められています。



● 鳥取城跡大手登城路復元整備イメージ



● 鳥取城跡大手登城路復元事業(令和3年春)



● 復元された擬宝珠橋ぎぼしぼし



● 復元された中ノ御門



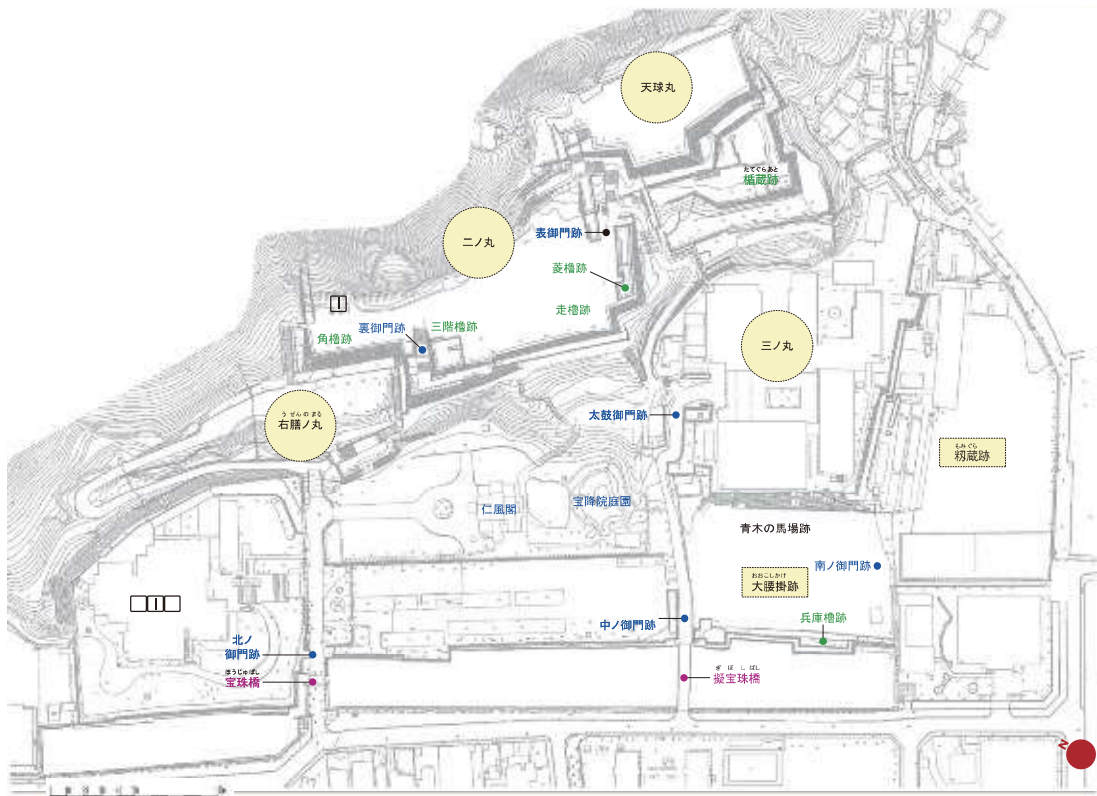
● 因幡国鳥取城修復願絵図 万延元年(1860)
鳥取県立博物館所蔵



● 鳥取城跡(国史跡) 天球丸より



● 鳥取城跡(国史跡) 全景



● 鳥取城跡 山ノ下丸

16. 池田光仲が残した遺産～鳥取東照宮と麒麟獅子舞～

池田光仲は、寛永7年(1630)に岡山藩主池田忠雄ただかつの長男として岡山藩江戸藩邸で産まれましたが、寛永9年(1632)父の死去により3歳で家督を継ぐと、幕府は鳥取藩政を仕切っていた池田光政とのお国替えを命じます。まだ幼少であった光仲は江戸藩邸に在住し、藩政は荒尾氏を始めとした家老衆に委ねられました。

徳川家康の娘の督姫とくひめの孫にあたる光仲は、寛永15年(1638)江戸城で「生まれながらの将軍」と言われる3代将軍徳川家光の前で元服し、「光」の字を賜って光仲を名乗りました。そして慶安元年(1648)19歳となった光仲は、鳥取に移るため江戸を発つ際に曾祖父の家康が祀られている日光東照宮かんじょうに参拝しています。

到着してほどなく家康の三十三回忌の法要を執り行くと、家老による藩政を藩主主導へと転換させ、同年末には東照宮勸請かんじょうを幕府に申し出て、翌年から着工されました。

全国の東照宮建立に多く関わった幕府の作事方御大工頭・木原杢允きはらもくいんよしひさ義久が棟梁となり、美作の大工も加わって造営され、慶安3年(1650)日光東照宮より家康の御神霊が勸請されました。また幕府の御用絵師で江戸城・名古屋城・二条城の襖絵などを手掛けた狩野探幽かのうたんゆうの作による三十六歌仙額さんじゅうろっくかせんかくや、藩工信濃大掾藤原忠国の鍛造による飾り太刀が奉納されています。

東照宮造営は徳川家康を曾祖父に持ち、3代将軍徳川家光の「光」を賜った光仲の、血縁関係も含めた徳川家と強い繋がりを内外に示すこととなりました。

また東照宮が鎮座する檜おうちだにの檜は「梅檀せんだん」の古名で、「梅檀は双葉より芳し」(大成する者は、幼いときから人並み外れて優れていること)という故事は、光仲の生い立ちを連想させます。

造営後、光仲は東照宮勸請を祝う「権現祭」を2年の歳月をかけ準備し、承応元年(1652)に盛大に執り行われました。このときの神幸行列の先払いとして登場させたのが麒麟獅子舞です。その様子を描いた「東照宮祭礼絵巻」には、麒麟を思わせる獅子頭を持つ獅子舞に、真っ赤な猩々しょうじょうのあやし役が見られます。

麒麟は、すぐれた為政者が民衆のための政治を行うと、その徳を慕って現れるとされる中国の想像上の動物で、光仲が神楽獅子の頭を麒麟に変えたのは、曾祖父の徳川家康のような立派な政治を行うことの決意表明だったのかもしれませんが。

江戸時代にはこの獅子舞を「獅子」と呼び、因幡東照宮ではその後も必ず「獅子」を登場させ、鳥取藩が獅子舞を指揮・監督する「獅子庄屋」を任命したことで、智頭往来や若桜往来に沿うように江戸・明治・大正・昭和と時代を跨いで広がっていき、明治時代から麒麟獅子舞と呼ばれるようになって因幡地方を中心に但馬地方や、明治期の移住によって北海道(利尻島・釧路)まで広がりを見せ、現在では休止分も含め約180の伝承が確認されています。

徳川家康との血縁関係や幕府との強い繋がりを背景に、鳥取藩主としての地位を築いた池田光仲は、その後12代続く鳥取藩主の藩祖となりました。元禄6年(1693)に鳥取城で死去しましたが、鳥取藩は光仲の死の直後、武内宿禰が隠れたと伝わるヒバ谷と呼ばれる地に墓所を選定しました。この墓所には、光仲と以後の歴代鳥取藩主とその夫人達が葬られており、現在では鳥取藩主池田家墓所として国指定の史跡に指定されています。

また明治時代に一旦、樗谿神社と改称された鳥取東照宮は、本殿・拝殿及び幣殿・唐門の3棟が国の重要文化財（建造物）に指定され、祭神の徳川家康と共に光仲と父の忠雄、祖父の忠継が合祀されています。

鳥取東照宮から広まった麒麟獅子舞は令和2年(2020)に国の重要無形民俗文化財に指定されました。

本市の麒麟獅子舞は現在でも「獅子」と呼ばれており、ほぼ一年を通して各地の神社の祭礼には様々な「獅子」が登場し、狸々があやし役となって重厚感のある舞いを見せています。

市内には、麒麟獅子舞の紹介や歴史的資料を展示する施設が点在し、鳥取駅前のモニュメントやベンチ、市内各集落を案内する看板などに加え、車体に麒麟獅子のラッピングが施されたバス「ループ麒麟獅子バス」が市内を運行するなど、あらゆる場所に麒麟獅子の姿を目にすることができます。

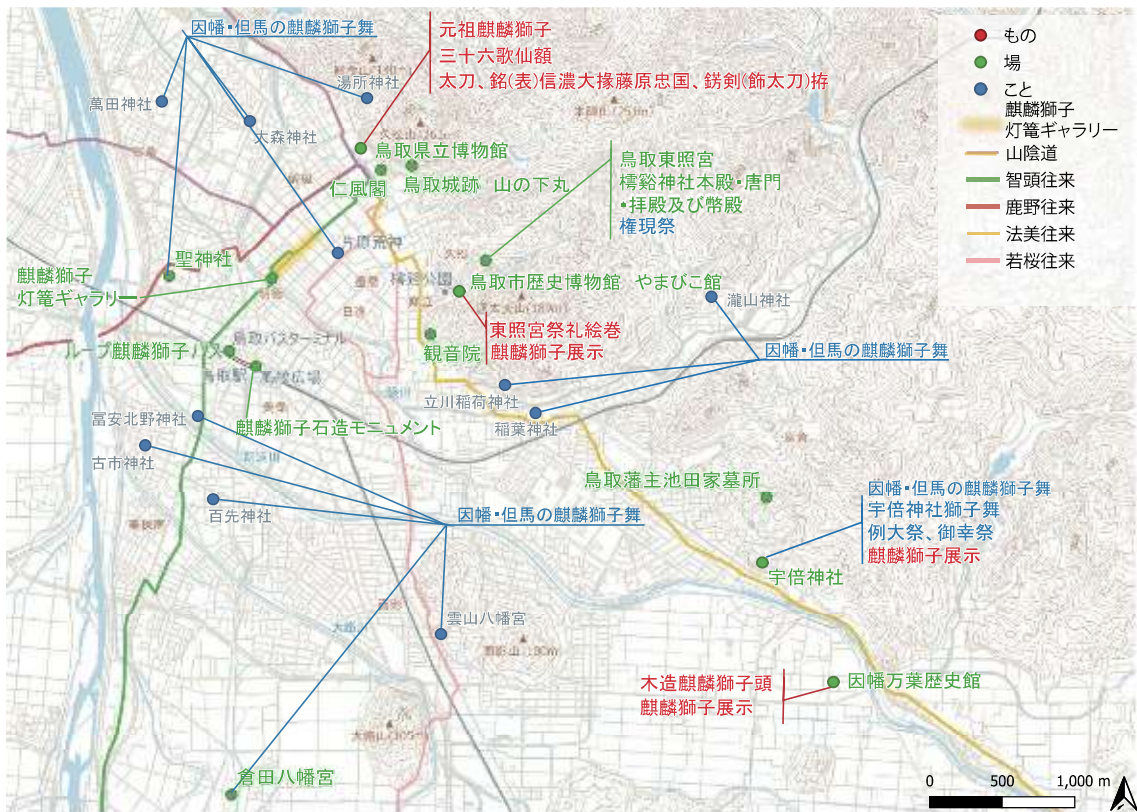


● 東照宮祭礼絵巻

鳥取市歴史博物館所蔵



● 倉田八幡宮麒麟獅子舞
(県無形民俗文化財)



● 16.池田光仲が残した遺産～鳥取東照宮と麒麟獅子舞～ ストーリーマップ

17. 山陰本線と地域の近代化

藩政の拠点であった鳥取城下町は、明治維新後の廃藩置県と島根県への併合で、政治の中心より外れたことにより、明治初頭から中期にかけて急速に衰退しました。明治政府の近代化政策も、西欧列強に対抗するため先進地の産業開発を優先するものであり、日本海側諸都市の衰退に拍車をかけました。

山陰地方は、日本全体の近代化の流れから遅れるようになり、明治後期には、工業化なども遅れ、「裏日本」と呼ばれる後進的なイメージの地域となってしまいました。陸軍の駐屯地の誘致（歩兵第四十連隊）など、その流れに抗する様々な努力が行われましたが、鉄道の敷設も、このような状況を変える切り札と考えられていました。

もともと交通量の多かった山陽側への陰陽連絡線と、地形が険しく船での移動が多かった山陰沿岸を横断する東西の路線が待望され、それぞれ鉄道建設の陳情運動が行われましたが、その実現はほかの地域よりも大幅に遅れました。しかし軍事的要求もあり、官営鉄道として完成したのは山陰本線でした。明治40年(1907)に境港から鳥取仮停車場までの山陰西線が^{よしひとこうたいし}開通し、嘉仁皇太子（後の大正天皇）の山陰道行啓に利用されました。この時、皇太子の宿舎として旧藩主池田家が鳥取城跡に建築した洋館は（扇邸）は、供奉員として同行した東郷平八郎^{とうごうへいはちろう}によって「仁風閣」と命名されました。赤坂離宮（現・迎賓館）などを手掛けた宮廷建築家の片山東熊^{かたやまどうくま}の設計によるフレンチ・ルネッサンス様式の建築は、山陰地方に現存する唯一の本格的近代洋風建築となっており、国の重要文化財に指定されています。

また、険しい地形に敷設された山陰本線の鳥取駅以東には、兵庫県の^{あまるべ}余部鉄橋や^{とうかん}桃観トンネルのように大規模な土木構造物の建設が必要とされました。現在も橋台の一部が残る千代川橋梁、照明器具や当時の鳥取駅の一部が鳥取鉄道記念物公園（沢井手公園）に保存されているほか、橋梁やトンネルなどは現役の施設として使用され、^{こせんきょう}跨線橋に使用されていた部材は、現在の鳥取駅の照明器具の部材に転用されています。

明治42年(1910)に路線名称を「山陰本線」とされ、京都～出雲市が開通した明治45年(1912)の記念式典には、鳥取城跡二ノ丸城址^{いわたかついち}を会場に内閣鉄道院主催で盛大に行われました。開通前は、地元の岩田勝市が作詞し、田村虎蔵^{たむらとらぞう}が作曲した「山陰鉄道唱歌」が作られるなど、地元の期待と喜びは大変大きなものでした。

また岩田勝市は、自由律の俳人として知られる尾崎放哉^{おざきほうさい}の鳥取第一中学時代の文学仲間であり、放哉の生誕地付近にある岩田の自宅は「岩田家住宅主屋、茶室、離れ」として登録有形文化財となっています。

鉄道の開通は、鳥取が「旧城下町」から「近代都市」へ変わる大きな節目となりました。大正4年(1915)には山陰初の近代的水道施設である美歎水源地水道施設が完成し、すでに設置されていた陸軍駐屯地に加えて、大正9年(1920)開学の鳥取高等農業学校や鳥取駅での蒸気機関車への給水設備の設置など工場誘致の条件が整いました。また、鉄道利用客を見込んで、明治30年(1897)に掘削された鳥取温泉や、因幡国を代表する名刹・摩尼寺の観光整備も行われ、大正～昭和初期には鳥取砂丘の観光地化も進められました。有島武郎や島崎藤村といった著名な文学者たちも山陰本線を使って鳥取を訪れており、志賀直哉の代表作『^{あんやこうろ}暗夜行路』は山陰本線に沿って物語が進行していく筋立てとなっています。



● 17. 山陰本線と地域の近代化 ストーリーマップ



● 千代川橋梁



● 山陰本線の鉄道遺構(小沢見)



● 山陰本線の鉄道遺構(白兎)



● 鳥取鉄道記念物公園(沢井手公園)

18. 災害と復興～都市の再生～

大正時代までの千代川は河口付近で蛇行し、そこに袋川が合流する地形となり、三角州となる久松山系の千代川沿岸は、もとは潟湖（ラグーン地帯）で、中世から近代初頭まで度々大洪水が発生していました。

中本友直^{なかもとともなお}は『五水記』(寛政8年(1796))に、文禄2年(1593)の高麗水^{こうらいみず}から寛政7年(1795)の乙卯水^{きのとうみず}まで、200年間におきた洪水のうち被害の大きかった5回について記しました。また鳥取藩士鈴木惟忠^{すずきこれただ}は、このうち寛政7年(1795)の乙卯水の状況を『因溢物語』(寛政8年(1796))として書き残しました。この二つの著書のきっかけとなった寛政7年(1795)の洪水は、江戸時代を通じて最大級の被害をもたらしたようで、城下町の交通の要衝であり、袋川に架かる若桜橋・智頭橋・鹿野橋がすべて流失してしまいました。藩による復旧が遅れる中、これらの橋の修復にあたったのは、秋里屋藤右衛門^{あきざとやとうえもん}ら新興の城下町商人たちでした。この時の工事記録である「御橋記録」が残されており、当時の復興の様子が偲ばれます。また、この洪水犠牲者の7回忌にあたる享和元年(1801)に建てられた慰霊碑^{でしきかいえとう}「溺死海会塔」が現存しており、当時の人々の記憶に強く残る災害だったことがわかります。

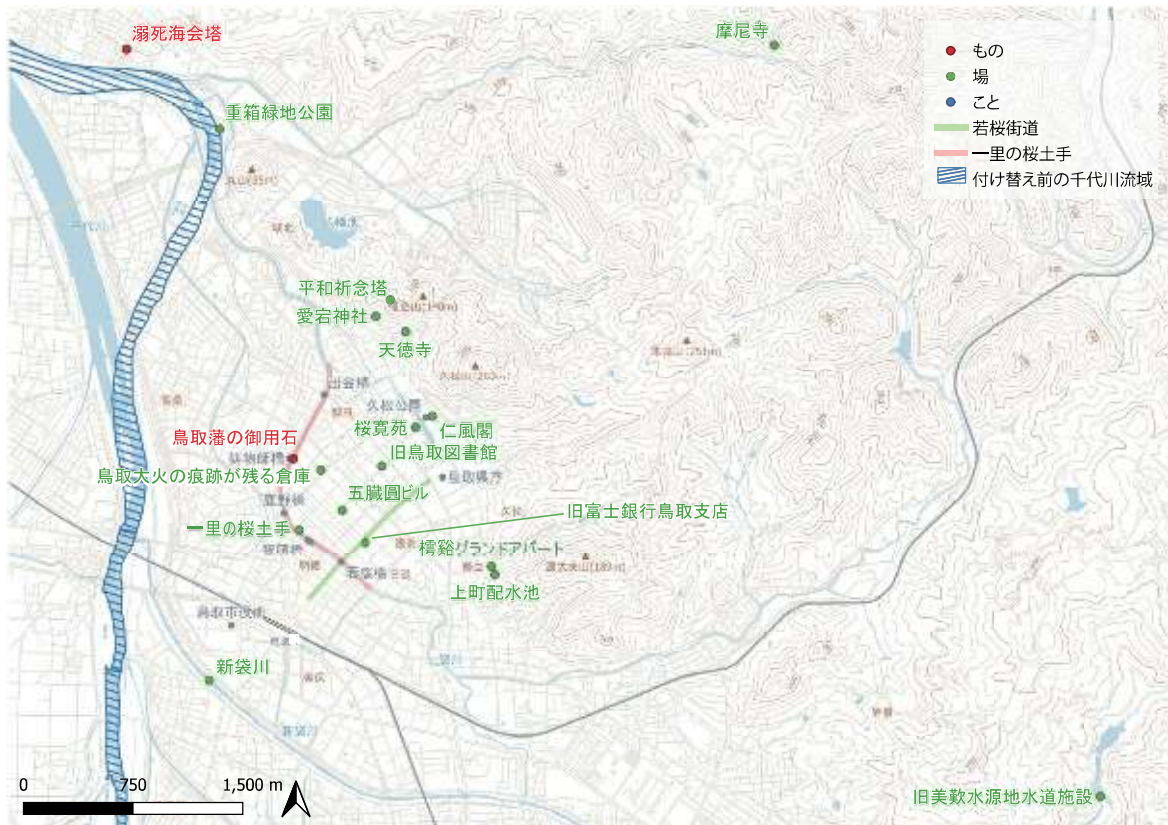
近代に入っても、度重なる水害は鳥取市の近代化の支障となっていました。完成直後の美敷水源地水道施設の貯水堰堤を決壊させるなどの被害を出した大正7年(1918)の水害を契機に、由谷義治^{ゆたによしはる}ら地元出身の政治家たちは国に千代川の改修を強く働きかけ、大正15年(1926)から国営事業として千代川・袋川の河川改修事業が行われました。蛇行していた千代川の流路を直線的に付け替え、新袋川が開削されて、ようやく大きな水害を免れることができるようになりました。重箱緑地^{じゅうぼろりよくち}や鳥取港などに、付け替え前の千代川の姿を一部見ることができます。その後、平成24年(2012)には袋川の上流域に殿ダムが完成し、水害への備えはさらに進みました。

水害に比べれば、因幡地方は地震災害の記録が比較的少ない場所です。しかし、太平洋戦争中の昭和18年(1943)、震度6を計測する記録的な地震が発生しました。旧城下町では、地盤の弱い町屋地域で家屋のほぼ全てが倒壊し、8割以上の建物が全壊しました。死者1,210名、被害総額1億6000万円(当時)の大震災となり、戦時中であったためその復興は容易ではありませんでした。このとき、昭和初期に立てられた都市計画(『鳥取都市計画概要』)事業の一部が実施され、主要街路の拡幅などが行われました。この地震の際に発生した断層は、「鹿野地震断層の痕跡」として現在も見ることができます。また戦後、連合軍最高司令官総司令部(GHQ)の鳥取軍政部の宿舍等に使用された樗谿グラウンドアパートは、昭和5年(1930)の建築ですが、地盤の強い東照宮門前に建築されたためか、この地震により数センチ傾いた状態で現存しています。その他、仁風閣や桜寛苑^{おうかんえん}といった、鳥取城に近い場所にはこの地震で倒壊を免れた建物が残っています。また、五臓圓ビル^{ごぞうえん}や旧鳥取図書館のような鉄筋コンクリート造の建物は、地盤が弱い場所であったにも関わらず倒壊しませんでした。

また季節風やフェーン現象による強風の影響を受け、鳥取城をほぼ全焼した享保5年

(1720)の石黒火事などの大きな火災が度々発生しました。現在も深く記憶されている昭和27年(1952)に発生した鳥取市大火災は、フェーン現象による強い南風の吹く4月に鳥取駅前付近を火元として発生し、防火帯となるべき袋川を越えて燃え広がりました。炎の塊が風に乗って飛ばされ、旧城下町の中心部分を全焼させたほか、久松山麓の天徳寺・愛宕神社にまで一部火の手が及びました。火災は夜まで続き、ついには久松山東側の摩尼寺近くにまで飛び火したそうです。12時間後に鎮火しましたが、被災者約24,000人、焼失家屋約5,000戸にのぼる大災害となりました。本町四丁目の土蔵風の鉄筋倉庫には、表面に焦げ跡が残っており、また防火壁となって鳥取市役所への延焼を防いだ若桜街道の旧富士銀行鳥取支店(現島根銀行鳥取支店)のビルも現存しています。

この火災を期に、若桜街道を中心に日本初の防火建築帯が整備され、山陰最初の2～3階建てコンクリート・ビル街が完成しました。また、旧城下町の中では、都市計画を実現する道路の拡幅や直線化が、城下町の周辺では区画整理による街路網の近代化などが行われ、現代の県庁所在地・鳥取市の中心市街地がこれを期に形づくられました。「鳥」と、復興しようとする^{やまもとかねふみ}伸び上がるらせんをイメージした山本兼文のモニュメントが四隅に取り付けられた若桜橋は、復興のシンボルとして、今も市民に親しまれています。



● 18. 災害と復興～都市の再生～ ストーリーマップ



● 鳥取大地震の被害(智頭街道筋)
写真提供:鳥取市歴史博物館



● 大正時代の水害状況(大工町筋の一部)
写真提供:鳥取市歴史博物館



● 鳥取市大火災の被害(旧富士銀行鳥取支店から市街地を望む)
写真提供:鳥取県立公文書館



● 袋川と桜土手の桜



● 旧富士銀行鳥取支店

19. 鳥取砂丘と久松山が織りなす自然

鳥取城とその城下町が形成された久松山周辺を含む平野部は、縄文時代に起こった大規模な気候変動による海水面の上昇によって海の底となりました。現在の海岸線から約2 km内陸の浜坂にある丸山の離水海食洞はその痕跡です。

弥生時代の寒冷化によって海水面が低下したことで、鳥取平野が形成され、千代川が運ぶ砂と日本海から吹く強い北西の風によって、内陸側に巻き上げられた砂が砂丘地を形成していきます。この海岸砂丘は東西約16 km、南北約2.4 kmと大規模なもので、長らく不毛の地とされていましたが、江戸時代に鳥取と但馬をつなぐ但馬往来が通っていたほか、鳥取藩の武術訓練場として活用され、明治時代には陸軍省の管轄下となり陸軍歩兵第40連隊の演習地となりました。

大正8年(1919)に「史蹟名勝天然記念物保護法」が施行されると、砂丘の調査が行われ、地形・地質学的な価値に加え、海浜植物・動物・風景・多鯨ヶ池に加え、砂丘内の遺跡など多面的な価値付けが行われました。昭和8年(1933)に天然記念物指定を文部省に申請しますが、当時はまだ陸軍省の管轄下にあったため、実現しませんでした。太平洋戦争終戦後の昭和25年(1950)に、砂丘地が国から鳥取市と鳥取大学に払い下げられ、昭和30年(1955)に国の天然記念物に指定されました。

指定地内には、通称「馬の背」と呼ばれる大きな高まりと、「スリバチ」と呼ばれる凹地があり、自然が生み出した雄大な景観を見ることができます。また132種の植物と約700種を数える昆虫が生息しています。

平成2年(1990)に設立された鳥取大学乾燥地研究センターは、乾燥地問題に組織的に取り組むため、全国共同利用施設として設立された我が国唯一の研究機関です。

一方、内陸部にある市街地周辺には豊かな自然が残っています。鳥取城が築かれた久松山や太閤ヶ平が築かれた本陣山をはじめ、周辺の山々には中国自然歩道が整備され、豊かな自然を体感でき、市民が気軽に訪れることができる憩いの場となっています。また、キマダラルリツバメチョウの生息地は、樗谿公園や、興禅寺・観音院など久松山の麓にある鳥取藩主池田家ゆかりの寺院が含まれており、池田家の家紋である揚羽蝶紋(因州蝶)を連想させます。このほか久松山にある鳥取東照宮には、蛍が生息する清らかな小川が流れ、社叢にはスダジイの巨木やモミ林が残り、山中にはヒサマツミドリシジミや、カスミサンショウウオなどの動物が生息するなど、動植物の貴重な生態系が残されています。



● 鳥取砂丘(浜坂砂丘)(国天然記念物)

20. 唱歌のふるさと

唱歌は、明治時代から第二次世界大戦前までの音楽教育の教科でした。明治政府は、音楽教員や音楽家の養成機関として東京音楽学校を明治23年(1890)に開校しました。鳥取市河原町出身の村岡範為^{むらおかはんいち}馳は、東京音楽学校第2代校長となり、明治25年(1892)には故郷である鳥取市内で講演会を行いました。この講演の影響を受けた永井幸次^{ながいこうじ}、田村虎蔵、岡野貞一が東京音楽学校に入学し、我が国の音楽教育に大きく貢献することになりました。

本市出身の永井幸次は教育者として活躍し、昭和26年(1951)には大阪音楽短期大学を設立し、昭和33年(1958)には大阪音楽大学に昇格させ、関西の音楽文化に対する貢献と尽力により「関西音楽界の父」とも呼ばれています。同じく本市出身の岡野貞一^{おんのさだかずみ}は、文部省から小学校唱歌教科書編纂委員を命じられ、『尋常小学読本唱歌』『尋常小学唱歌』などの編纂にたずさわり、「故郷」「朧月夜^{おぼろづきよ}」など多くの唱歌を作曲しました。唱歌「きんたろう」「だいこくさま」を作曲した田村虎蔵(岩美町出身)は、子どもの目線に立ち、子どもに分かりやすい話し言葉と、親しみのある旋律の曲の推進を図り、『幼年唱歌』など数多くの教科書を編集し、児童の音楽教育に大きな影響を与えました。

本市が誇る偉大な音楽家たちが子どものために残した唱歌は、市内各所に歌碑やメロディーボックスが設置され、鳥取市立遷喬小学校には田村虎蔵が作曲した校歌が残るほか、「童謡・唱歌とおもちゃのミュージアム わらべ館」では、これらの音楽家たちの業績と作品を分りやすく展示しています。

また、岡野貞一の代表作「故郷」は、久松公園入口に歌碑があり、そのメロディーは、特急列車の車内放送や、この地域の防災行政無線の時報として使われ、本市を訪れる人々や市民の耳を楽しませています。



● 童謡・唱歌とおもちゃのミュージアム わらべ館



● 岡野貞一



● 「ふるさと」歌碑



● 「もみじ」歌碑

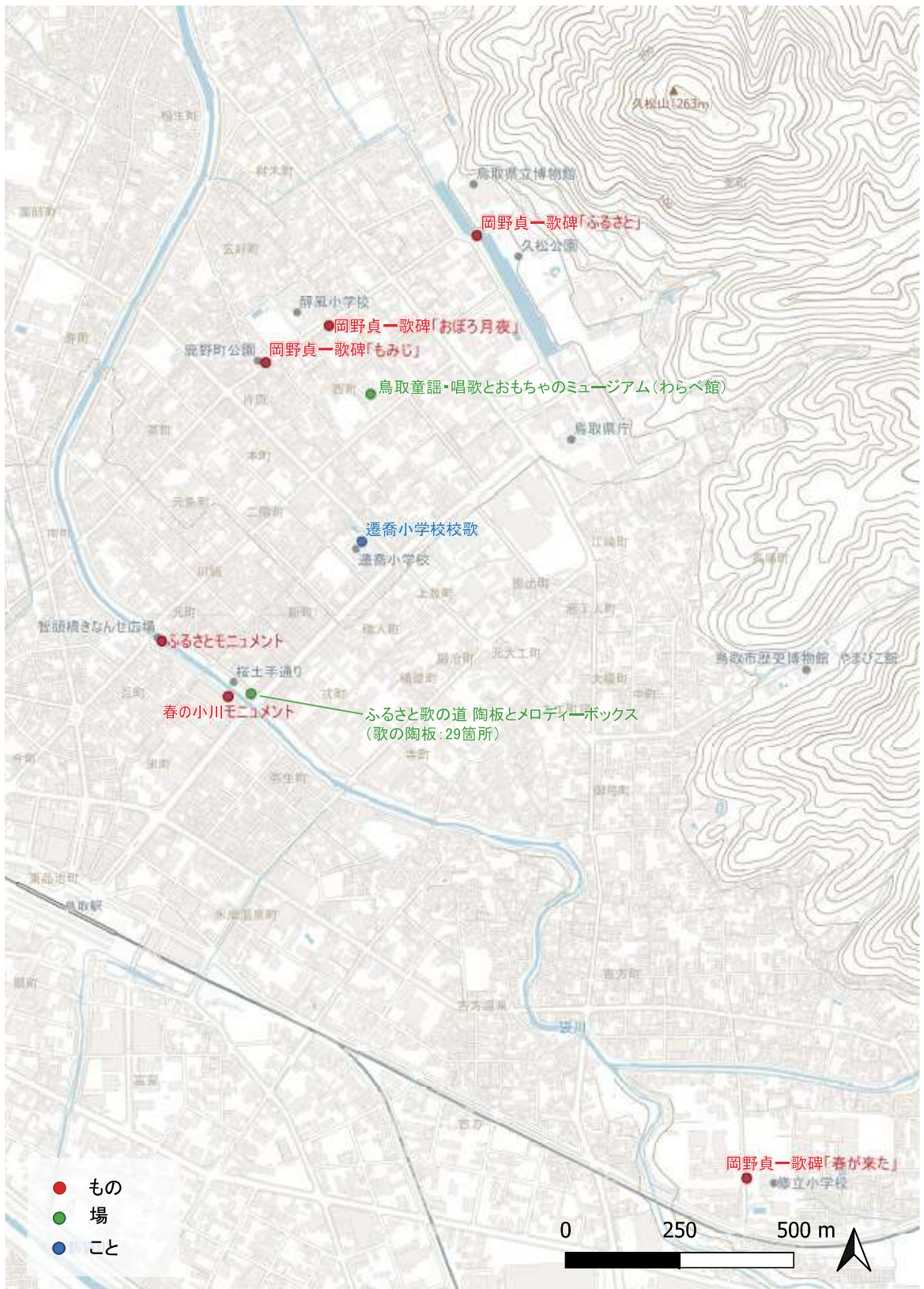


● 「おぼろ月夜」歌碑



● 「桃太郎」歌碑

写真提供:鳥取童謡・唱歌とおもちゃのミュージアム(わらべ館)



● 20. 唱歌のふるさと ストーリーマップ